

研究論文における文末表現の一考察

卓 星 淑

1. はじめに

韓国人日本語学習者の学習の段階は初級、中級、上級に分けられる。日本語学習の指導は初級は文型中心に「です・ます」中心の丁寧な口語体から「だ」体、「である」体に進んでいく。日本語学習が中級以上の段階になると多様なジャンルの文章に接するようになり、日本語における述語表現に関する理解の問題と文体、文章表現上の理解という問題に直面することになる。このような韓国人学習者の話しことばと書きことばの混用については遠藤(1983)、岡野(1987)の指摘があり、述語表現の不均衡についても佐々木・川口(1994)と大島(1993)などの指摘がある。このように、書きことばと話しことばの区分や文末に現れる述語表現の正確な使い分けは中級以上の日本語学習者には解決すべき難関の一つであると思われる。そうした学習者への日本語教育に携わる者として、韓国語と日本語の文末表現の実態と文章のジャンルにより文末表現がどのような様相を帯びているのかを理解する必要があると考え、新聞の文章(報道文・コラム・社説)やエッセイなどの文末表現を分析してきた(卓 1997a 1997b, 1998)。その結果、韓国語の文章と日本語の文章にはそれぞれ特色があり、文章の種類によるその差もでてくるのがわかった(卓 1997c, 1998)。今回は韓国と日本の研究論文を20編ずつ取り上げ、分析することにした。研究論文は文章体として最も規範性が守られていると考えられるからである。

2. 分析対象と方法

2.1 分析対象

分析対象は、日本語と韓国語で書かれた日本語学、韓国語学の研究論文20編ずつである。日本語の論文は原稿用紙400字詰め30枚から40枚程度、韓国

語の論文は400字詰め50枚から60枚の長さ制限があるもので学会誌に掲載されたものから選んだ。日本語の場合は『国語学』と『日本語教育』、『計量国語学』に載せられている論文で1989-1998年までの期間中のものであり、韓国語の論文は『国語学』、『韓国語学』、『日本学報』に掲載されているもので時期は1978-1999までである。選択の基準はなるべく現時点から近いもので論文の長さが一定しているもの、語学専攻者によるものである。論文の詳細目録は論文の末尾に記すことにする。

2.2 分析方法

韓国語も日本語も述部の核になるのは「動詞」「形容詞」「名詞+だ(이다(ida))」である。これら、述部すなわち、文末表現は用言の語幹に補助動詞、補助形容詞、助動詞などがつき、語尾または助詞で完結する。このような枠組みは韓国語と日本語はほとんど同じであると見ることができる。それで「動詞」「形容詞」「名詞+指定詞」を根幹とする文末部分をセンテンスごとに番号をつけ、形態別に7つに分類し、それを下位分類する方法をとった。それは下記のようなものである。

- (1) 「있다」と「た」系列；「있」を含んだ文末表現で「나타났다, 애써 보았다, 있었다, 전달할 수 있었다, 사실이었다」などで「た」系列は「た」で終わる文末表現。
- (2) 「動詞+다」 と 「動詞る形」；「-한다, 못한다, 이해된다, 보인다, 보아진다」などの動詞の終止形表現。
- (3) 「動詞+補助動詞」；「쓰여있다, 실현되고 있다, 대비해 본다」と「-ている」など。
- (4) 「その他の文末表現」；動詞に否定、意志、推測、疑問などの要素が付け加えられた表現で「-겠다, -않는다, -못한다」などと「られる、させる、たい、ようだ」などの表現。
- (5) 形容詞と「い形容詞」；「있다, 없다, 같다, 특이하다」などと「高い、多い」など。
- (6) 補助形容詞；「- 수 있다, 보기 어렵다, 좋을 듯하다」など「-くない、-

やすい」など。

- (7) 「名詞+이다」などを含む文末表現と「である」; 「사실이다,-ㄴ 수 있을 것이다,-된 것이다,뿐이다,때문이다」などと「現状である、多様である、ようである、のである」など。

3. 分析結果

日本語の研究論文の文末表現を分類したのが〈表1〉、韓国語の文末表現を分類したのが〈表2〉である。

〈表1〉日本語の研究論文の文末表現

論文 番号	た系列		動詞る形		動詞+補助動詞		その他		い形容詞		補助形容詞		である		合計
	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	
1	2	1.8	36	31.9	16	14.1	33	29.2	0	0	0	0	26	23	113
2	2	2.0	29	28.4	10	9.8	33	35.4	3	2.9	2	2.0	23	22.5	102
3	4	4.4	24	26.4	11	12.1	25	27.4	1	1.1	0	0	26	20	91
4	12	8.2	36	24.7	27	18.5	30	20.5	5	3.4	4	2.7	32	21.9	146
5	1	1.1	28	31.5	4	4.5	23	25.8	3	3.4	1	1.1	29	32.6	89
6	11	11.5	26	27.1	7	7.3	22	22.9	4	4.2	1	1.0	25	26	96
7	1	0.7	45	31.9	30	21.3	48	34.0	2	1.4	2	1.4	13	9.2	141
8	7	7.8	12	13.3	4	4.4	50	55.6	0	0	1	1.1	16	17.8	90
9	4	2.9	39	28.3	16	11.6	51	37.0	5	3.6	5	3.6	18	13.0	138
10	2	2.2	29	31.5	5	6.5	31	33.7	2	2.2	0	0	23	25.0	92
11	11	11.3	27	27.8	8	8.2	15	15.5	4	4.1	7	7.2	25	25.8	97
12	1	0.8	41	33.6	9	7.4	42	34.4	5	4.1	4	3.3	20	16.4	122
13	10	8.1	57	46.3	13	10.6	17	13.8	12	9.8	2	1.6	12	9.8	123
14	4	3.8	26	24.8	5	4.8	32	30.5	8	7.6	1	0.9	29	27.6	105
15	18	18.4	27	27.6	10	10.2	25	25.5	5	5.1	2	2.0	11	11.2	98
16	2	2.9	29	42.0	2	2.9	24	34.8	2	2.9	1	1.5	9	13.0	69
17	14	17.5	25	31.3	7	8.7	14	17.5	4	5	2	2.5	14	17.5	80
18	16	10.1	53	33.5	23	14.6	29	18.4	5	3.2	3	1.9	29	18.3	158
19	12	10.5	38	33.3	9	7.9	29	25.5	3	2.6	3	2.6	20	17.6	114
20	10	8.1	42	34.2	22	17.9	25	20.3	0		1	0.8	23	18.7	123
合計	144	6.6%	669	30.6%	238	10.9%	598	27.3%	73	3.3%	42	1.9%	423	19.4%	2187

〈表2〉韓国語の研究論文の文末表現

論文 番号	「있다」形		動詞(시)形		動詞+補助動詞		その他の文末表現		形容詞		補助形容詞		「名詞+이다」 など含む文末表現		合計
	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率	
1	3	3.3	30	33.3	4	4.5	18	20	16	17.8	12	13.3	7	7.8	90
2	53	39.8	29	21.8	15	11.3	2	1.5	16	12.0	6	4.5	12	9.0	133
3	8	3.5	52	22.7	7	3.1	15	6.6	25	10.9	30	13.1	92	40.2	229
4	2	1.9	39	37.5	17	16.4	2	1.9	5	4.8	24	23.1	15	14.4	104
5	29	32.6	24	27.0	10	11.2	1	1.1	5	5.6	9	10.1	11	12.4	89
6	1	2.1	26	55.3	3	6.4	1	2.1	3	6.4	6	12.8	7	14.9	47
7	5	3.8	37	27.8	22	16.5	8	6.0	10	7.5	34	25.6	17	12.8	133
8	24	22.6	22	20.8	20	18.9	0	0	9	8.5	7	6.6	24	22.6	106
9	12	19.0	16	25.4	2	3.2	9	14.3	8	12.7	5	7.9	11	17.5	63
10	12	8.0	30	20	34	22.7	12	8.0	11	7.3	22	14.7	29	19.3	150
11	7	10.6	21	31.8	3	4.5	2	3.0	20	30.3	1	1.5	12	18.2	66
12	28	20	22	15.7	8	5.7	10	7.1	11	7.9	26	18.6	35	25	140
13	27	23.3	23	19.8	13	11.2	2	1.7	17	14.7	17	14.7	17	14.6	116
14	6	2.6	63	27.6	11	4.8	8	3.5	32	14.0	22	9.7	86	37.7	228
15	27	23.5	26	22.6	10	8.7	0	0	11	9.6	9	7.8	32	27.8	115
16	31	18.0	45	26.2	20	11.6	4	2.3	30	17.4	23	13.4	19	11.1	172
17	22	13.8	52	32.7	8	5.1	9	5.7	11	6.9	29	18.2	28	17.6	159
18	12	8.1	33	22.3	12	8.1	11	7.4	8	5.4	38	25.7	34	23.0	148
19	36	17.1	40	19.0	23	10.9	18	8.5	12	5.7	29	13.7	53	25.1	211
20	27	11.2	92	38.2	12	5.0	16	6.6	21	8.7	27	11.2	46	19.1	241
合計	372	13.6%	722	26.3%	254	9.3%	148	5.4%	281	10.3%	376	13.7%	587	21.4%	2740

〈表1〉の分類項目の「た系列」とは、動詞・形容詞・「名詞+である」などの「た」形であり、その他は助動詞などを含む文末である。「である」は名詞・形式名詞・助詞、その他に「である」がついた文末である。「その他」は「～である、～なりがちである、～か、～かである」のようなものである。「である」の上接語については〈表6〉で詳しく分類してある。

〈表1〉の日本語文末の全体的様相を見ると、過去や完了を表す「た」形の出現が平均して6.6%で、高い比率を見せるのは論文番号15番、17番の18.4%と17.5%である。低いのは0.7%、0.8%のものもあり、論文による差が大きい。

「動詞る」形は30.6%、「動詞+補助動詞」は10.9%、「その他」が27.3%、

「い形容詞」、「補助形容詞」が3.3%、1.9%、「である」で終わる文末が19.4%ずつ出現している。研究論文の文末は「動詞る」、「動詞+補助動詞」動詞に助動詞的要素を含んでいる「動詞文」が大部分で、次が「である」の中に含まれている「名詞文」、ついで「形容詞文」の順になっている。

〈表2〉の分類項目は大体日本語の分類項目に準じて分けてみた。「있다」形は過去や完了を表す文末であり、「動詞(하다)」は動詞の「る形」に当たる表現である。その他の文末も「動詞」に否定・意志・推測・疑問などの要素が付け加えられた表現であり、「이다」を含む表現は「名詞+이다」、「不完全名詞」の「것」に「이다」がついた表現である。

〈表2〉の韓国語の文末の様相を見ると、「있다」を含む表現が13.6%を占め、全体的に日本語より高い比率を示している。そして「動詞하다」は26.3%、「動詞+補助動詞」は9.3%、「動詞」に否定や疑問、意志などの要素を付け加えた「その他」は5.4%でこの「動詞文」に当たる文末の比率は日本語の方より低くその反面、形容詞、補助形容詞を含む「形容詞文」は10.3%、13.7%でかなり高い。「名詞文」を含む「이다」の文末は21.4%で日本語の「である」文末とそれほど差がない。

各文末表現ごとに見ていくことにするが、今回は紙面の制限上、下位分類したものは日本語と韓国語をそれぞれ載せず、特徴が大きいと思われるものだけを表に出しているということを知っていただきたい。

3.1 「た」と「있」を含む表現

研究論文における「た」形と「있」を含む頻度数の差はあるが、新聞文章の特に報道文などに比べるとそれほど多い方ではない。同じジャンルである研究論文にも「있」が多く出現することは「있」の意味領域が広いと言うことを示す。これはたとえば、「その本読みましたか。」という文に対しその答えとして否定の場合、「いいえ、読みませんでした」「いいえ、まだ読んでいません」の二つの答えが可能であるのに対し、韓国語の場合は、両方「아니오, 안 읽었어요」「아니오, 아직 안 읽 었어요」になる。これを見ても「있」の意味領域は「た」と異なっていることがわかる。このことについては生越

(1997) は「日本語は目の前の状況に関わる出来事のすべてがわからないと過去形が使えない。一方、朝鮮語は目の前の状況がある出来事の結果だということさえわかれば過去形が使える」と指摘している。

また、박영준 (1998) は形態素「있」の変遷過程を考察し、「있」は「어 있」から「있」になったと述べているし、そこで現代語の中に「있(았)」は「어 있」の縮小された形として使用されるのがあるとみている。

このような意味の違いが、文章のみでなく、会話の中でも「た」と「ている」用法の自然で正確な習得の障害になる可能性がある。

「だ」と「である」の「た」形として「だった」と「であった」が対応するが、新聞の文章などでは「だった」が多数出現していたのに対し、研究論文には「だった」の文末は1例も出現していない。研究論文、特に国語学・日本語学の研究者の規範性がうかがわれるようだ。

3.2 「動詞る」形と「動詞ㄴ다」形

この文末は日本語も韓国語も最も比率が高い。しかし、この文末の特徴はその語彙が限定されているということである。〈表3〉は日本語の「動詞る」の分布を見たものである。

〈表3〉を見ると、「ある」と「可能表現」の動詞が、それぞれ14.8%、20.5%を占めている。「ある」は韓国語の「있다」と共通する用法が多い動詞であり、可能表現も韓国語の場合は大きく言えば形容詞の範疇にはいる。日本語の場合も「ある」は状態性の動詞であり、可能表現というのも状態の表現である。品詞の分類において、韓国語と日本語の形態と意味の境界線の違いから動詞または形容詞に入れられているのであろう。

〈表3〉「動詞る形の分布」(日本語)

ある		する		なる		可能表現の動詞		その他の動詞		合計
個数	比率	個数	比率	個数	比率	個数	比率	個数	比率	
99	14.8%	130	19.4%	115	17.2%	137	20.5%	188	28.1%	669 (100%)

〈表3〉で見るように「ある」「する」「なる」の三つの動詞が50%以上を占め、次に可能表現の「言える」などの可能動詞と「一ことができる」と「わかる」が20.5%を占めているが、「一ことができる」の形が「可能動詞」より頻繁に用いられている。

韓国語の代表的な動詞は「한다」「된다」の二つの動詞である。この二つの動詞は多様な意味を持つ。「한다」は「する」と同じ用法の他、「한다」の前に「-야(만)」などの要素がきて「なければならない」「すべきである」の意味を持ち、特に新聞の社説文などでは使用頻度が圧倒的に高い。また「라 한다」の形で「という」の意味にもなる。「된다」の場合も日本語動詞「なる」の用法と受身になる用法がある。「된다」の50%以上は受身の意味の「된다」である。この二つの動詞以外に「보인다(見られる)」、「쓰인다(使われる)」、自発用法に近い「생각이 든다(思われる、考えられる)」などが含まれ、韓国語の「動詞_{ㄴ다}」は、日本語の「その他」の文末の意味領域にまたがっていると考えられる。

3.3 「動詞+補助動詞」

日本語も韓国語も10.9%、9.3%の分布をみせている。日本語の方が若干多い。しかし、韓国語の「있」の意味が日本語の「た」と「ている」にかけられていることや「있」が「이있」から来ているということを考え合わせると、日本語の「動詞+補助動詞」が韓国語のそれより多いのはうなずける。日本語の「動詞+補助動詞」は「ている」が主な表現である。「てみる」「ていく」「てくる」「ておく」も少数見られる。「ている」189文の中には「(ら)れている」が41文で15%以上を占める。

韓国語の場合は「고 있다」「어 있다」「어 간다」「해 준다」「해 놓는다」「고 말다」「해 본다」の表現であるが、「고 있다」が主流をなしており、「고 있다」の中にも受身要素は20%ぐらい含まれている。

3.4 その他の文末表現(助動詞的表現と終助詞)

その他の文末は日本語の場合は動詞に助動詞がついている表現である。全

体的数字から見ると、韓国語のそれに比べ、全体の中の比率が20%以上多い。日本語のその他を整理したのが〈表4〉である。値する項目は「ない」「られる」「させる」「そうだ」「ようだ」「たい」「う／よう」に終助詞「か」を伴う文末である。

〈表4〉その他の文末表現（日本語）

論文 番号	ない	られる	せる	ようだ	そうだ	たい	う、よう	だろう	う、ようか	だろうか	か	名詞止め	合計
	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	
1	4(1)	12(11)				2	6	2	1	3	3		33
2	4(2)	15(3)				0	11	1	2	0	0		33
3	4(2)	12(9)				2	2	0	2	3	0		25
4	7(2)	7(5)				7	4	0	5	0	0		30
5	10(2)	6				1	6	0	0	0	0		23
6	2(1)	9(1)				1	1	2	0	3	4		22
7	5(0)	22(17)	1			4	7	2	0	7	0		48
8	5(4)	24(21)				3	15	0	3	0	0		50
9	13(8)	17(11)				9	6	3	0	3	0		51
10	16(12)	14(9)				0	1	0	0	0	0		31
11	2(1)	5(3)				2	3	2	0	1	0		15
12	15(5)	6(5)				4	10	2	1	3	1		42
13	7(3)	10(2)				0	0	0	0	0	0		17
14	9(5)	6(3)		1	3	2	4	5	2	0	0		32
15	4(2)	7(1)		3		0	3	1	4	0	0	3	25
16	17(9)	6(3)				0	0	1	0	0	0		24
17	1	3(2)				5	3	2	0	0	0		14
18	8(4)	11(3)				1	7	1	1	0	0		29
19	4(2)	19(9)	1			2	3	0	0	0	0		29
20	6(2)	12(6)				1	4	0	2	0	0		25
合計	143(67)	223(124)	2	4	3	46	96	24	23	23	8	3	598

〈表4〉で注目されるのは「否めない、判別できない、見られない」のように「ない」で否定される述語に可能表現のものが多くことである。「ない」を含む文末143文中67文が可能形のものである。また「られる」を含む文末223文中124文が、「考えられる、思われる」の出現数である。「考えられる、思われる」が多いのも論文の文末表現の大きな特徴と言える。

「名詞文」においては、「である／であった」が堅く守られていることに対

し、「ようだ」と「そうだ」も極少数ながら出現していること、また、「う（よう）」と「だろう」の出現をみると、「う（よう）」が119例に対して「だろう」が47例と、「だろう」がはるかに少ないものの、文章体のことばとして位置づけられていることがわかる。終助詞「か」を伴う「う（よう）か」、「だろうか」はいずれも23例あり、「う・よう」と「だろう」の様相とは違っている。このほかに「あるのではないか、なぜか、表すことになるのか」は「か」の項目に入れた。

一方、それに比べ、韓国語のその他の文末には「-겠다（だろう・であろう・う（よう）」「-자（う（よう）」「-지 않다(ない)」「-인가(であろうか）」「-ㄴ까(だろうか・であろうか）」「-라（命令の表現）」がある。日本語の「その他」に最も多い「られる」が含まれないし、「ようだ」「そうだ」「たい」に当たる表現が含まれていない。受身や自発などの要素は韓国語の場合、「動詞の-다」に属し、様態表現は「補助形容詞」に属する。また「う（よう）」「だろう」で表現される文末は韓国語においては「-ㄴ 것이다」で表現されることを考え合わせても、日本語の文末表現の方が助動詞的要素を好む傾向にあると言える。

3.5 形容詞と補助形容詞

形容詞と補助形容詞の文末は韓国語の方が多い。「있다（ある）」という形容詞（形容詞文の50%以上で全文末数の5%、日本語の「ある」は全文末数の4.5%である）と「-수 있다（可能表現）」、また「ようだ」や「そうだ」に相当する表現が補助形容詞に含まれているからである。補助形容詞文を分類したのが〈表5〉である。

A類；-듯하다, -기 어렵다(ようだ、らしい、—にくい、やすい)

B類；-수 있다, -수 없다(可能表現形式)

C類；-지 않다（形容詞の否定形）

韓国語の「-수 있다」を含む表現（299文／2740文）と日本語の可能動詞（137文）、「られる」の中の可能表現と思われる分数（20文）を合わせ、「ない」

〈表5〉補助形容詞の分布(韓国語)

論文 番号	A類	B類	C類	合計
	出現数	出現数	出現数	
1	2	9	1	12
2	1	3	2	6
3	3	26	1	30
4	2	22	0	24
5	1	7	1	9
6	1	5	0	6
7	5	27	2	34
8	1	5	1	7
9	2	2	1	5
10	3	17	2	22
11	0	1	0	1
12	3	22	1	26
13	1	15	1	17
14	5	16	1	22
15	0	7	2	9
16	1	21	1	23
17	2	24	3	29
18	2	36	0	38
19	12	10	7	29
20	2	24	1	27
合計	49(13.0%)	299(79.5%)	28(7.5%)	376

の中の可能表現(67文)を合わせると、研究論文には可能表現が10文中1文以上出現することになる。

日本語の形容詞の「な形容詞」は「である」に分類し、それを入れると形容詞文は144文で全体の6.6%になり、韓国語の形容詞文から「있다」を除外すると日本語の形容詞文が若干多い。

3.6 「である」と「이다」を含む表現

日本語の「である」文を分類してみたのが〈表6〉で、韓国語の「이다」を含む表現を分類したのが〈表7〉である。日本語における純粋な「名詞文」は「名詞+である」と「形式名詞+である」の294文である。それに比べ、韓国語の「名詞文」は「名詞+이다」「-것이다」の570文である。「である」文は「な形容詞」の「形容詞文」「助詞+である」「ようである・そうである・べきである」などの助動詞を含む表現が含まれる。〈表6〉と〈表7〉からも日本語の文末表現の方が多様な要素を含んでいるということが言える。

韓国語の「名詞+이다」と「것이다」は大体比例的に出現する。しかし、「것이다」は1例もない論文から58例もある論文まであって開きが大きい。書き手により差があるようだ。「것이다」は日本語の「形式名詞+である」表現と同じ用法とともに「것이다」の前に来る用言のテンスや用言の種類により日本語の助動詞「う(よう)」や「だろう」の意味を持つ用法もある。詳しい考察が必要である。

〈表6〉「である」の分布（日本語）

論文 番号	な形容詞	名詞+である	形・名+である				動詞+である	ようである	そうである	べきである	ごとくである	その他	合計
			もの		の								
			こと	の	その他	その他							
出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数	出現数		
1	2	7	2	6	5	1	0	2	0	0	0	1	26
2	1	8	1	7	3	0	2	0	1	0	0	0	23
3	0	5	3	6	11	0	1	0	0	0	0	0	26
4	4	18	0	2	6	0	0	2	0	0	0	0	32
5	3	7	6	2	7	0	2	1	0	0	0	1	29
6	5	11	4	3	0	2	0	0	0	0	0	0	25
7	3	6	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	13
8	3	10	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	16
9	9	5	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	18
10	2	3	4	4	7	0	1	0	0	0	0	2	23
11	1	14	5	2	0	0	1	0	0	0	0	2	25
12	3	7	0	0	4	1	1	4	0	0	0	0	20
13	5	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
14	6	4	2	4	3	3	4	1	1	1	0	0	29
15	0	3	2	0	1	1	1	2	0	0	0	1	11
16	6	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	9
17	2	2	4	2	1	0	3	0	0	0	0	0	14
18	5	17	2	1	0	0	4	0	0	0	0	0	29
19	7	7	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
20	4	3	4	0	3	0	1	5	1	1	1	0	23
合計	71	146	48	43	52	9	24	18	3	2	1	7	423

〈表7〉「이다」を含む文末表現（韓国語）

論文 番号	名詞+이다	「것이다」	的이다	その他	合計
	出現数	出現数	出現数	出現数	
1	7	0	0	0	7
2	4	8	0	0	12
3	32	58	0	2	92
4	11	2	0	2	15
5	3	8	0	0	11
6	3	4	0	0	7
7	5	12	0	0	17
8	15	8	0	1	24
9	4	7	0	0	11
10	18	8	1	0	29
11	11	1	0	0	12
12	11	21	3	0	35
13	8	9	0	0	17
14	35	47	2	2	86
15	29	2	1	0	32
16	16	2	1	0	19
17	12	16	0	0	28
18	12	22	0	0	34
19	34	19	0	0	53
20	27	19	0	0	46
合計	297(50.6%)	273(46.5%)	8(1.4%)	9(1.5%)	587

4. 結 び

日本語教育の現場で「です／ます」体と「だ／である」体の学習の段階はいつが好ましいか、話しことばと書きことばの区別、文体上の違いを果たしてどのように接近し、把握させていくべきかは日本語教師としては甚だ難しい問題であることを実感している。日本語学習の進展につれ、軽い一日の日記からレポート、エッセイ、説明文、論説文、マスコミ文などへ接するようになる。それぞれ、ジャンルの違いから文末表現がちがってくることは当然のことである。学生たちが外国語である日本語を学習し、その文体上の違いを理解し、文体に応じた文末表現を駆使するのは難しいことであろう。こういう問題点を解決していく過程として韓国語と日本語の述語の構造の現れ方を分析し、その述語表現の相違点を調べようとした。

そこで、新聞の文末分析、コラムの文末分析に続き、今回は研究論文の文末分析を通し、日本語における書きことば、文章体の文末表現と韓国語の文章体の文末表現の分析を試みた。両方に見られる共通点は文章体が堅く守られていると言うことであり、意味的傾向としては大体同じであると言える。ただ形態上それぞれの特徴が現れていると言えよう。日本語では、「である」形の使用実態、可能表現の実際の形態などから、韓国語より基本述語に他の要素を付け加える傾向が強いことがわかった。韓国語は「だ」と「である」の区別はなく、「이다」の一つの形式で「だ」と「である」の意味をカバーし、文章体文末の区別基準にはならないが、たとえば「—しようとする」に相当する表現「려고 하다」「고자 하다」の中、話し言葉では使用しない「고자 하다」が研究論文には圧倒的に多く用いられていた。また、疑問助詞「か」を伴う表現は日本の研究論文には出現するが、韓国語の論文には「가,까」を伴う表現は5個の論文に15例（論文19番に8例）現れるだけである。「가,까」は話しことばと認識されているようだ。

以上全体的に文末表現の様子を見たが、語彙レベルの考察が今後の課題である。

日本語の研究論文資料

1. 坪根由佳里「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』84号、1994.
2. 柴公也「漢語動詞の態をいかに教えるかー韓国学生に対してー」『日本語教育』59号、1986.
3. 浅野裕子「「と思われる」にみる日英の誤用論的原则」『日本語教育』88号、1996.
4. 生越直樹「日本語の接続助詞（て）と朝鮮語の連結語尾(아)と(고)」『日本語教育』62号、1987.
5. 劉向東「「わけだ」文に関する一考察」、『日本語教育』88号、1996.
6. 佐藤勢紀子、仁科浩美「工学系学術論文に見られる「と考えられる」の機能」『日本語教育』93号、1997.
7. 中村英子「動作動詞テイルの「反復」についてー「反復」の解釈が生まれる諸条件ー」、『日本語教育』93号、1997.
8. 谷口秀治、「テイル形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』92号、1997
9. 藤城浩子「判断のモダリティ」についてのー考察」『日本語教育』92号、1997.
10. 木下りか「ハズダの意味分析ー他の真偽判断のモダリティ形式と比較してー」『日本語教育』92号、1997.
11. 草津恵美子「有体他動詞と無体他動詞の意味上の分布」『計量国語学』第16巻8号、1989.
12. 植田瑞子「「自発」表現の一考察ー自発文の二系列ー」『日本語教育』96号、1998.
13. 鎌田倫子「内容節をとる動詞のコトとノの選択規則ー主動詞の意味分類と節の時制からー」、『日本語教育』98号、1998.
14. 原沢伊都夫「テアル形の意味ーテイル形との関係において」『日本語教育』98号、1998.
15. 豊田豊子「「そうだ」の否定の形」、『日本語教育』97号、1998.
16. 鈴木智美「「～てしまう」の意味」、『日本語教育』97号、1998.
17. 近藤泰弘「「の」「こと」による名詞節の性質ー能格性の観点からー」『国語学』190、1997.
18. 前川喜久雄・吉岡泰夫「発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与」『国語学』190、1997.
19. 日高水穂「授与動詞の体系変化の地域差ー東日本方言の対照からー」『国語学』190、1997.
20. 大橋純一「埼玉特殊アクセントの個人差と地域差ー三領域間における二拍名詞の体系的変化動向を比較しつつー」、『国語学』187、1996.

韓国語の研究論文分析資料

- 1.정민수 「부정형태 ‘잖(잖)’ 에 대하여」 『국어국문학』 101,1989.
- 2.한영옥 「「おじ」와「おば」에 대한 한국인 학습자의 認知에 대하여」 『日本學報』 35집,1995.
- 3.박양구 「사동과 피동」 『국어학』 7,1978.
- 4.편무진 「「捷解新語」의 主格表現에 대하여」 『日本學報』 37집,1996.
- 5.홍민표 「大學生의 言語生活에 관한 韓日比較研究」 『日本學報』 37집,1996.
- 6.신용태 「上代日本語의 母音音素에 관하여」 『日本學報』 37집,1996.
- 7.오종열 「10種 日本語教科書의 文法事項에 대한 分析」 『日本學報』 37집,1996.
- 8.조문희 「문형분석」 『日本學報』 37집,1996.
- 9.김승곤 「이두토씨 「亦中」과 「良心」의 의미」 『한말연구』 3호,1997.
- 10.김용경 「높임의 토씨 ‘요’ 에 대한 연구」 『한말연구』 3호,1997.
- 11.김택구 「경남 사천시 서포 지역어의 음운 체계」 『한말연구』 3호,1997.
- 12.김준희 「‘와’ 구문의 의미 해석」 『한말연구』 3호,1997.
- 13.김형배 「국어 사동사 파생법의 변천에 관한 연구」 『한말연구』 3호,1997.
- 14.손세모돌 「연결어미 “-고자”와 “-려고”에 대하여」 『한말연구』 3호,1997.
- 15.조오현 「청양 방언의 분화에 관한 연구」 『한말연구』 3호,1997.
- 16.허재영 「우리말 문법화 연구의 흐름」 『한말연구』 3호,1997.
- 17.황화상 「국어의 접사 체계」 『한국어학』 5호,1997.
- 18.유혜원 「‘을/를’이 나타나는 피동문 연구」 『한국어학』 9호,1999.
- 19.시정곤 「선어말어미의 형태-통사론」 『한국어학』 8호,1998.
- 20.조일영 「국어 선어말어미의 양태적 의미 고찰」 『한국어학』 8호,1998.

參考論文及び參考文献

- 遠藤織枝(1983) 「話しことばと書きことば—その使い分けの基準を考える—」 『日本語学』 vol.7
- 岡野喜美子(1987) 「話しことば教育と書きことば教育—教科書作成の理念と實際—」 『講座日本語教育』 第28分冊
- 大島弥生(1993) 「中国語/韓国語話者における日本語モダリティ習得に関する研究」 『日本語教育』 83号
- 佐々木泰子・川口良(1994) 「日本人小学生/中学生/高校生/大学生と日本語学習者の作文の文末表現の発達過程に関する考察」 『日本語教育』 84号
- 田代ひとみ(1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ、わかりにくさの原因をさぐる—」 『日本語教育』 85号
- 益岡隆志(1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 生越直樹(1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方—結果状態形と関連を中心にして—」 『日本語と外国語の対照研究 4 『日本語と朝鮮語』 下巻 研究論文編、国立国語研

究所

박영준(1998) 「형태소-있-의 통사적 변천」 『한국어학』 8호, 한국어학회

卓星淑 (1997a) 「文末表現에 관한 一考察」 『경원대학교논문집』 제16輯

(1997b) 「신문문장의 문말표현에 관한 일고찰」 (한국어신문문장)

『인문논총』 제6호

(1997c) 「新聞文章の文末表現の考察—日本語と韓国語の対照研究」 『亜細亞文化研究』 第2輯

(1998) 「文末表現の一考察—韓国語の「動詞+있다」と日本語の「動詞+た」をめぐって」 『인문논총』 제7호